

失敗しない

# 大腸ESD

## 治療困難例の スキル&テクニック

国立がん研究センター中央病院内視鏡センター長／内視鏡科長

斎藤 豊 編



株式会社 医学と看護社

## 推薦の言葉

今日、我が国の内視鏡治療は様々な手技やデバイスの開発により国際的に先端医療を提供しており、国内では食道、胃、大腸の治療ではESDが標準治療となっている。

ESDが登場する以前、EMRが主流であった外科的手術を選択せざるを得なかった時代に比べればESDという画期的な治療法により内視鏡治療は目覚ましく発展し、また患者自身への身体的負担も軽減してきている。

著者の齋藤豊先生「国立がん研究センター中央病院 (NCCH) 内視鏡センター長」との出会いは約20年前、すでに大腸内視鏡挿入法や通常観察の内視鏡診断学をマスターし、我々とは陥凹型大腸がんの発見法や、拡大内視鏡診断学など熱く議論する日々であった。その頃の内視鏡治療の主流はEMRであり、大型の腺腫や早期癌では超多分割切除や開腹手術になるため、はじめてNCCHに大腸ESDを導入し、大腸ESDを保険適用されるまでの標準治療に位置付けた貢献者の一人である。

本書の特徴はNCCH内視鏡部で行われたESD症例をもとに、NCCHの現場での実践臨床で気づかされる細やかな技術、工夫、コツが随所に書かれていることである。さらに困難症例、偶発症対策には多くの内視鏡画像写真が使われ、合併症対策についても詳しく解説されており、ESD以外のPolypectomyやEMRを行う内視鏡医にも大変参考となる工夫も満載で、内視鏡治療医には待望の一冊である。

大腸ESDという画期的な治療方法により内視鏡治療による限界はほとんどなくなったと言える。が、しかし誰もができる治療法でもない。ITナイフをはじめ、新たな切開ナイフやトラクションなどのデバイスの開発から以前に比べれば簡単にはなってきたものの、出血や腸管穿孔の二大合併症対策は必須であることに変わりはない。さらにESDと腹腔鏡下手術の選択において深達度診断が重要となる。深達度診断には拡大観察診断は必要不可欠であり、NBIからpit診断に至るまで、その診断が必要とされ

ることは言うまでもない。

本書ではNBIによる拡大診断のJNET分類からpit診断に至るまで、多くの画像から内視鏡治療手技と共に、内視鏡診断についても詳しく説明されている。

ESDの治療法と共に内視鏡診断について同時に学習でき、楽しみながら一気に読破できる本である。

また本書は、上級者にしかできない大腸ESD治療の困難症例に対しても、盲腸や彎曲部位や高度の線維化をきたしている遺残再発、超巨大な全周性病変、巨大なIsなど、初級者にも理解できるように写真と図を用いて詳しく解説されている。

このような繊細な治療技術は日本人だからこそ成しえた方法であり、海外から多くの医師が、その技術を学びにNCCHを訪れる要因であろう。指導教育をもとに、指導法も磨かれていく。そのような経験も、本書には活かされている。

ESDの保険適応は最大径20mmから50mmの早期癌または腺腫の場合という条件つきで適用されて以降、内視鏡治療法の適応が変わりつつある。これまでは20mm前後のSSA/PやLST-GはEMRによる治療が大半を占めていた。にもかかわらず、最近の傾向として20mm以上というだけで、ESDが選択されるようになってきており、技術習得のためのESDが主となりスネアリング法の技術が衰退していることも現実である。ESDは、スネアリング法とは全く異なる新たな治療手技である。が、スネアリング法は治療の基本であり、その技術がESDにも活かされることは間違いない。さらに病変に応じた最適の治療法を選択するためにもESDからEMR、すべての内視鏡治療法をマスターしておきたい。

本書はESD手技を中心に書かれているが、EMRの大切さも十分に伝えられており、30mmまでのLST-GはEMR、直腸のカルチノイドについても、

ESMR-LやEMR-Cが適応であるなどが述べられ、ESDに偏ることなく、適応基準を明確にしており、ESD以外の治療法についても習熟すべきことがこの本より伝わってくる。

今日においてESDは出血や腸穿孔の合併症を恐れて未だチャレンジな治療法ととらえられているが、内視鏡的縫合術が進化してくれば、困難な治療ではなくなり、病変を全層切除し、完全縫合するという時代がくるかもしれない。しかしそのような未来においても、ESDという治療手技は大切なのである。本書は、まさに、その途中過程での重要事項の本とも言える。日本人が築き上げた伝統技術のESDという治療手技を伝えていくためにも、後世に残す貴重な一冊と考える。ESDを行っている内視鏡医には、ぜひ、一読いただきたいことはもちろんであるが、診断の大切さと、それに基づく治療技術を説かれているため、日本の内視鏡医だけではなく、ESDに取り組んでいる海外の医師達にもぜひ参考にしてほしい一冊である。ESDが国際的標準治療になるように取り組んでいる我々の希望でもある。

齋藤豊先生をはじめとした共著者のメンバー全員は、今や日本を代表する大腸ESDのprofessional colonoscopist達である。

今後、執筆者達の研究が一層の発展を遂げることを願うとともに、ESDを行う内視鏡医、初学者が本著を参考とされ積極的に内視鏡治療に取り組んでくれることを祈念します。

2016年8月

医療法人隆風会 藤井隆広クリニック 理事長  
藤井隆広